

Word Passages in Rites of Passage

Yoshida Tetsuo
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355914>

出版情報：英語英文学論叢. 40, pp.1-17, 1990-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：



Rites of Passage における言葉の旅

吉田 徹夫

(序)

Golding の随筆集 *The Hot Gates* に収められている小品で、7、8 歳頃の餓鬼大将だった自分を思い出して綴った “Billy the Kid” という楽しい随筆がある。学校に行けばケンカがやれると楽しみに出かけるのだが、算数やお祈りの時間などがあった。言葉それ自体が大好きで、鳥の卵や切手のように単語を収集していたこの子は、皆が割り算をしている時、“butt (barrel), butter, butt (see goat)” のような言葉遊びで時間をつぶした。また祈とう文を暗唱しなければいけないのに、“suicide” と “seaside” をもじった “sweeside” や、“crescent” と “descant” を組み合わせた “creskant” といった新語を造り唱えていた。

学習態度がこんな調子だから、当然初日から先生にとがめられるのだが、その時のことを作者の Golding はこう書いている——“On this first day, when Miss taxed me with my apparent inactivity, I smiled and said nothing, but nothing, until she went away.”¹ Golding は “appear” の形容詞 “apparent” を用いて、子供だった自分が見かけはともかく、頭の方は “active” であったことを匂わせている。「角」と「酒樽」の意味を掛けた “butt” を比較変化させたり、新語を造ったりの言葉遊びで叱られた子供時代の Golding と、40 年位経った後も同じような言葉の操りをやっている作者の彼とが重なって見えて面白い。²

いきなり Golding の子供時代から書き始めたのは、三つ子の魂百まで、というわけで、“Billy the Kid” 発表から更に 20 年経て刊行された *Rites of*

1. *The Hot Gates* (Faber & Faber, 1965), p. 160.

2. 「40 年位」と記したのは、随筆の最後で先生がくれた本に “BILLY GOLDING / 1919 / PRIZE FOR / GENERAL IMPROVEMENT” と署名されたと書かれているが、“Billy the Kid” は 1960 年 11 月 25 日の *Spectator* に発表されたものだからである。

Passage にも、言葉の多義性を利用した遊びが主題と絡ませて実に巧みに生かされているからである。

そもそも『通過儀礼』という題名からして曰くありげである。勿論、1909年刊行の人類学の古典 Arnold van Gennep の *Les rites de passage* を利用したものだが、Golding が小説で触れる主要な儀式は「赤道祭」で、“passage”に「航海」と赤道の「通過」とが掛けられている。そしてこの小説の主人公が、植民地のオーストラリアで初めて行政の仕事を行おうとする俗人の貴族の子弟 Talbot と、これまた英国国教会の牧師になりたての聖職者 Colley という二人の若者であってみれば、この赤道祭が、van Gennep が最も詳しく論述している “Initiation Rites” (第6章) と重なっている筈である。*Rites of Passage* における言葉の多義的な意味の操作に目を向けながら、社会において大人としての役割を果そうとする精神的過渡期にさしかかった二人の青年の変容を探ってみたい。

(1)

この小説は、Talbot が自分の “godfather” で政府の要職にある貴族に書くことを約束した航海日誌でできているのだが、全278頁のうち、186頁から247頁には、赤道祭のあと食を断って死んでいく Colley 牧師の妹宛ての手紙が挿入されていて、二重構造になっている。そして Colley の手紙は、Talbot が日誌で記述しているのとはほぼ同じような出来事に触れているのである。

最初私たち読者は、船酔い、顔つなぎの会見から起る Anderson 船長との確執、船長を見返すための乗客サルーンでのミサ、紳士・淑女の乗客や士官たちとの齟齬、赤道祭といった航海中の出来事を、上流階級的優越感の強い Talbot が高見の見物の気分で独善的に描いているのを読んでいく。その後、生まれが良くなって階級的劣等感を抱きながらも聖職者としての使命感に燃える、しかも女好きな Talbot と対照的に、ホモ的性向をもつ内気な Colley が、同じ事柄を全く違った態度で、つまり真面目に自分をかかわらせながら記述していったのを Talbot と共に読むことになる。そして Talbot がそうであるように、私たちの判断が修正を迫られていく。この二人の若者の書きものは対照をなしながらも相補の関係にある。俗と聖をそれぞれ体現した二人は、身なりや階級といった外観や権威に対する姿勢において互いに光をあて合い、言葉への関心も同程度に強いのである。

俗の主人公で語り手でもある Edmund Talbot は、政府要人を後楯にしていることを笠に着て、船の中で王様のように我がもの顔で振舞うとするのであるが、全く見込みがないわけではない。“my knowledge of the springs of human action was still in the egg” という反省が暗示するように、³ 経験から学ぼうとする姿勢は持っている。Don Crompton は、Talbot が Austen の Emma に似て、“snobbery” と “class consciousness” は強力であっても、“he has some capacity for growth — an innate good sense, a receptivity to the lessons of experience” と評している。⁴ 彼の学ぼうとする知的好奇心はまず言葉への興味に見て取ることができる。

小説は、“Honoured godfather, With those words I begin the journal I engaged myself to keep for you — no words could be more suitable!” という、言葉遣いに気を配ったお世辞で始まるが、その後 8 頁弱続く船での初日の記述にはいくつかイタリックスの語が現れる。“tween decks”, “mizzen mast”, “veer”, “gimbals” といった海事用語が強調されているのである。ナポレオンとの戦争が続行中の大西洋を下ってオーストラリアへ向う Talbot は、枕許に 1769 年発行の Falconer の *Marine Dictionary* を置き、水夫たちに負けない程に “the tarry language” を話せるようになると決意したのであった。この海事用語への関心は、色好みの彼が、Coleridge の肖像画を描いた画家 Brocklebank の娘、実は情婦らしいのだが、Zenobia をものにする場面を記述する時にも発揮されることになるが、そこに立入る前に、Talbot の言葉への関心が海に関係した用語だけに限られてはいないことに注目しておきたい。

Talbot は、移民船でかつ軍船でもあるこの船の最先任士官 Summers に招待されて客用サルーンへ赴くが、地味なグレイの服を着た、クエーカーのような物腰の Granham 嬢に紹介される。彼女が士官たちとトランプ遊びの話をしていたのを知った Talbot は、彼女に取り入るつもりで、「ご教授」(“instruction”) 願いたいと発言するが、これが裏目に出てしまう。

Now there was the devil of it. The smile vanished. That word

3. *Rites of Passage* (Faber & Faber, 1980), p. 146. 以下同作品からの引用は頁数を本文中カッコ内に記す。

4. *A View from the Spire: William Golding's Later Novels* (Basil Blackwell, 1985), p. 137.

“instruction” had a *denotation* for me and a *connotation* for the lady !

“Yes, Mr Talbot,” said she, and I saw a pink spot appear in either cheek. “As you have discovered, I am a governess.”

(p. 49)

Talbot は、Exeter 大聖堂参事会員であった父が死んだために Granham 嬢がオーストラリアで家庭教師をせざるを得なくなった事情を全く知らずに、この“lady”のご機嫌を取るつもりで軽口をたたいたのである。それがとんだシッペ返しを受けることになったのだが、「外延」「内包」という論理学用語の導入はユーモラスで、彼の語り口が深刻になるのを救っているし、同時に言葉に対する彼の関心が強いことを示している。

上の場面では“instruction”を意識的に掛け詞にしたのではないが、Zenobia を自分の船室で抱こうとしたことをパトロンに報告する Talbot の筆使いには、この手の言葉遊びが意図的に用いられている。

We wrestled for a moment by the bunk, she with a nicely calculated exertion of strength that only just failed to resist me, I with mounting passion. My sword was in my hand and I boarded her! She retired in disorder to the end of the hutch where the canvas basin awaited her in its iron hoop. I attacked once more and the hoop collapsed. The bookshelf tilted. *Moll Flanders* lay open on the deck, *Gil Blas* fell on her and my aunt's parting gift to me, Hervey's *Meditations among the Tombs (MDCCLX) II vols London* covered them both. I struck them all aside and Zenobia's tops'ls too. I called on her to yield, yet she maintained a brave if useless resistance that fired me even more. I bent for the main course. We flamed against the ruins of the canvas basin and among the trampled pages of my little library. We flamed upright. Ah — she did yield at last to my conquering arms, was overcome, rendered up all the tender spoils of war! (p. 86. 下線部は筆者による)

海事用語の「(敵船に)横付けする, 乗り込む」(board), 「中樞帆(トップス

ル)、「主帆(メーンセイル)」(main course) は、相手の女性の上に「乗り移り」、「服」をはぎ取って、食事の「メイン・コース」よろしく、彼女をいただく、といった性行為と掛けてある。

Talbot は自分のパトロンを楽しませるためにかなり際どいシーンを記述しているが、その際、言葉を遊ばせながら喜劇に仕立てている。だが、上述したような、掛け詞を利用した言葉遊びを命名することはしていない。それを“paranomasia”と呼ぶのは第二の主人公の Colley 牧師で、妹に宛てた手紙の中でこの難かしい単語を使っている。

(2)

この手紙は、先に少し触れたように、ひとりよがりな観客 Talbot の視点から語られた出来事を、観られている被害者の Colley の側から説明しているという形をつくっている。Golding が得意とする、この複眼的視点をを用いた逆転の手法によって、俗と聖、観客と参加者、独善の単純さと純真の複雑さといった対照が浮かび出てくる。

Talbot と Colley との関係については、そこに Apollo と Dionysus、つまり“forces of law and morality”と“instinctive drives”の対比を見たり、⁵ “a late Augustan idiom of Taste, Enlightened Good Sense and Benevolence”と“a Romantic idiom of Feeling”⁶との対立を読み取る批評がかなり定着しつつある。Talbot の“voice”が“sane and complacent scepticism”のそれであり、Colley のは“passionate although sometimes vague and confused commitment”の声だという Gindin の評も、上と同じく二人の書きもの、性格を対立、対照の点から把えたものである。⁷ 同じ出来事を表と裏の両面から読ませるこの小説の二重の語りの構造が、二人の若者の相違点、対照を明らかにするのに適していることは否定の余地がないことであるが、同時に二人の相似点をも私たちに示してくれている。

Talbot には“godfather”の政府要人が後楯としてついているように、Colley にも、“Manston Place”に心遣いするようにという妹への忠告(p.

5. S. J. Boyd, *The Novels of William Golding* (Harvester Press, 1988), p. 163.

6. Mark Kinkead-Weeks & Ian Gregor, *William Golding : A Critical Study* (Faber & Faber, 1984), p. 271.

7. James Gindin, *William Golding* (Macmillan, 1988), p. 78.

187)が暗示する如く、後援者がいたようだ。また、船長とその部下たちに対する態度において、Talbotがパトロンの権力を利用して自分の意志を押し通そうとするのと同じように、Colleyも神に身を捧げる英国国教会の牧師という身分に対しては敬意が払われて当然だという権威意識を強く持っていた。それが祭服という外観の権威に頼ることへと導き、彼は水夫たちのなぶりものになる。二人のこのような姿勢は、船の世界の支配者である筈の船長の権威をも各々の権威の下位に位置するものと見なしていたために、Anderson船長の怒りも不条理なものとし映っていなかった。⁸

権威へのこだわりが暗示するように、二人の青年は見せかけ、外面に弱い。Talbotは、Zenobiaが“her middle ages”に近付いているとわかっていながらも化粧上手の彼女に“a magical youth and beauty” (p. 66)を見て何かものにしようとする。Colleyもミサをあげている時にろうそくの光で美しく見えた彼女を“a young lady of great piety and beauty” (p. 211)と記している。また平の水夫で美少年のBilly Rogersに対する判断においても二人はよく似ていて、その顔にTalbotは“wide-eyed candour” (p. 252)を見、Colley牧師は“the manly grace”, “beauties of mind and spirit” (p. 217)を感じ取っている。

更に二人の青年に共通するものに、船の造りやそこに働く者たち、そして海事用語への関心がある。Talbotについては既に触れた通りだが、Colley牧師も妹に宛てた手紙の中で、“waist”, “ladders”, “yards”, “bowsprit”などの海事用語をイタリック体で強調している。そしてTalbotと同じように、Colleyも掛け詞の遊びが好きなのである。

俗人のTalbotは女をものにする場面を記述する時に、海事用語を掛け詞として用いていたが、聖職者のColleyは同種の用語を神への思いに掛けている。水平線に見知らぬ船の帆を見た時の不安を妹に次のように伝えている。

There was a sail appeared briefly on the horizon and I offered up a brief prayer for our safety subject always to HIS Will. However, I took my temper from the behaviour of our officers and men, though of course in the love and care of OUR SAVIOUR I have a far securer

8. 船長に対する二人の青年の共通した態度を表すのに Golding は注意深く “remiss” という語を用いている (130, 187, 203の各頁を参照)。

anchor than any appertaining to the vessel!

(p. 187)

Colley は“anchor”を斜字体にして、「錨」という意味だけでなく、キリストを「頼みの綱」とするという比喩的意味に掛けていることに妹の注意を引こうとしているのだ。後者の意味について Johnson の辞書は、“It is used, by a metaphor, for any thing which confers stability or security”と説明し、用例として『ヘブライ人への手紙』の第 6 章、19 節が挙げられている。この件には“an anchor of the soul, both sure and stedfast”という句が見られる。自分自身を、キリストの“the great Army”の“the last and littlest soldier” (p. 240) と見なす Colley 牧師には、キリストが「救を全うせん為めに、人となり、苦難を嘗め、誘惑を味ひ給ひしことを、高調力説してをる」⁹ この *Hebrews* は熟知していたものであろうし、作者の *Golding* もそういう読み方を期待しているかもしれない。

上述した“anchor”の使い方は“paronomasia”と呼ぶことができるわけだが、Colley が実際にこの用語を用いているのはやはり船に関連した事柄においてである。彼は自分をオーストラリアに乗せていってくれるこの老朽船を“this strange construction of English oak which both transports and imprisons me” (p. 223) と言及するのだが、その直後に“transport”という語には面白い“paronomasia”があると書き加えている。「運ぶ、輸送する」という意味に、“imprisons”との連想で「流刑に処する」という意味、更には「夢中にさせる、我を忘れさせる」までが掛けられていよう。

“paronomasia”は *O.E.D.* の第二版の“paronomasia”の項において“A playing on words which sound alike ; a word-play; a pun”と説明されている。私は「掛け詞」という日本語を充ててきたが、それは「地口」よりも言葉の多義性を連想させてくれるからで、研究社の『新英語学辞典』の説明を利用させてもらおうと、ルネッサンス期の修辞学における“pun”の四つの下位区分の一つとしての「掛けことば」(paronomasia) というよりは、同一語を異なった意味に用いた「多義的地口」(polysemantic pun) に相当すると思う。¹⁰ Talbot の使った“board”, “main course”, Colley の“anchor”, “transport”はその好例だが、実はこの小説のタイトル“passage”にもいくつかの意味が込められている。

9. 山谷省吾『聖書入門』弘文堂、昭和27年、208頁。

10. 『新英語学辞典』研究社、1983。“pun”の項参照 (983頁)。

(3)

この小説 *Rites of Passage* は英国からオーストラリアへの航海中の出来事を、特に Colley 牧師の死を軸に描いていて、“passage”が第一に「航海」の意で用いられているのは明白なのだが、その使い方はいきなり最初から出てくる。それは既に(1)で引用した書き出しのパトロンへの挨拶の辞に続く、小説の4行目からのパラグラフの中で、“my passage to the other side of the world”, “our long passage from the south of Old England to the Antipodes” (p. 3)と2回使われている。これは勿論、船の運行、地理的空間移動を指しているが、同じ運行でも太陽のそれが掛けられているかもしれない。それは海上での船の位置を知るために、船長、士官たちが太陽観測を行うが、それが“rite”と言及されているからである(37頁参照)。

船が通過していく空間を絞り、この小説での大きな出来事が「赤道祭」であることを考え合わせると、“passage”が赤道通過(crossing the equator)をも指していることは明らかで、この祭は小説で“ceremony”と言及されていて、一つの“rite”とみることができる。この儀式は、峠を越す時や渡河の場合の儀礼と同類のもので、Gennep のいう「空間的通過儀礼」(ceremonies of territorial passage) の一つにあたるであろう。¹¹

ある地点から他の地点への移動の範囲を更に狭めて船の上での空間移動を考えると、船の中央部、メイン・マストの下に引かれた「白線」に思い至る。Talbot は、Colley 牧師が祭服をまとしてこの白線を越え船の前部へ行くのを目撃した時のことを、“he crossed the white line at the mainmast which delimits their [the people’s] approach to us unless by invitation or for duty” (p. 105) と記している。また、急進的社会思想家の Prettiman が、婚約した Granham 嬢と船首部へ向うのを見て、“I watched them pass on over the white line that separates the social orders” (p. 274) と述べる。「白線」は英国階級社会の境界線を表していて、Colley 自身、この線は“separates us from the common people, be they either seamen or emigrants” (p. 210) と妹に書いている。この英国老朽船は、“our floating

11. A・ファン・ヘネップ著『通過儀礼』綾部恒雄、裕子訳、弘文堂、昭和62年、18頁。英訳では「空間的通過儀礼」に“a rite of spatial passage”をあてている所もある (*The Rites of Passage*, tr. M. B. Vizedom & G. L. Caffee, The University of Chicago Press, 1975, p. 22)。

society” (p. 144) と言及されるし、また Talbot の “Class is the British language” (p. 125) という言葉が端的に示すように、陸の世界の階級秩序が厳然と生きている世界なのである。「白線」を通過することはこの境界線を犯すことであって、Prettiman は意識的にそれを行うわけで、それを “social passage” と称することができよう。Colley 牧師の場合、「白線」を通過する許可を船長に求めた際に、狂ってるのか、と言われるように、社会秩序からの逸脱が認められるが、それ以上に、船首楼に赴いて赤道祭で自分をなぶりものにした水夫たちにキリストの教えと許しを知らしめる気持が強烈なのであった。聖界から俗界への “spiritual passage” の意味がこめられる。また Talbot 自身もこの線を通すのだが、それは “physical passage” とも称すべき類のものである。

Talbot が「白線」を越えて船首部へ赴くのは、まず船の構造を知るためであったが、次は Zenobia と密会する場所を捜すためであった。結局、便利な場所が見つからず、自分の船室で彼女と抱き合うことになる。この場面は、既に引用した通り海事用語を掛け詞に使うことで描かれていたが、そこで、相手の Zenobia を征服するための男性としての武器を “my sword”, “my conquering sword” と書いていた(86頁参照)。この性的取っ組み合いを Talbot は “passage between me and Miss Zenny” (p. 90) と称している。作者 Golding はタイトルに用いた “passage” に、「戦闘、渡り合い」の意の “a passage of [at] arms” を掛けて言葉遊びをしている、と見てよいであろう。O.E.D. 第二版の “Passage” の項、III. 13. c. にその ‘fig.’ として “a verbal altercation or dispute” の次に、“an amorous fence or encounter” という語義説明がある。

前者の「言葉のやりとり」は、船長室で行われる。牧師自殺の原因についての取り調べに関連があると思われる。この時のことを Talbot は “I found that the first part of the morning was to be passed in an enquiry.” (p. 248) と記しているが、証人の Rogers が、船長に “Buggery” のことだと詰め寄られて、“Shall I begin with the officers, sir?” と答えた所でこの査問会は打ち切られることになるわけで、この取り調べも一つの “rite of passage” と言えよう。

後者の語義は、Zenobia に対する Talbot の口説きと性的攻撃に関連している。俗人 Talbot にとって、赤道祭という通過儀礼は “sexual rite” という意味を持つことになったわけだが、実は聖職者 Colley にとっても性的意味が

与えられている。牧師自身が掛け詞として用いていると妹に書いた“transport”は、彼が抑圧していた同性愛的性向を暗示していて、赤道祭によってそれが意識化されることになり、Colley 牧師は未知なる自分を発見する「航海」を体験することになるのである。

(4)

Colley が、“amusing ‘paranomasia’ ”があるよ、と記した“transport”という語が使われるのは、次のような状況においてである。Colley は自分の船室の前で、高級士官の Deverel と Cumbershum とが手紙(実は Zenobia の恋文)を渡せ、渡さないの口汚い口論をやっているのを諷めようとするのだが、Deverel に「引っ込んでろ。さもないと船長の所へ連れて行くぞ」とおどされ、怯えてすぐに部屋に戻る。牧師としてふさわしい服装をしないで姿を見せたことを後悔し、汗をかきながら牧師の服を身につけるのだが、その時、聖書をすつと開く。神のしもべとして問題のある行為なのだが、一種の「占い」、[consultation of the oracle] を実行したのである。彼の目がとまった言葉は、「歴代志略」下巻の第8章7—8節の“The Hittites, and the Amorites, and the Perizzites, and the Hivites, and the Jebusites which were not of Israel”という件であった(p. 223)。Colley は不遜にも Anderson 船長、Deverel, Cumbershum 両士官を、この「イスラエルの子孫にあらざる」人たちと同じ類にしてしまう。悪いことをしたと思った彼はひざまずき、“forgiveness”を乞うが、そのあと次のように書いたのである。

I record this trivial offence merely to show the oddities of behaviour, the perplexities of the understanding, in a word, the *strangeness* of this life in this strange part of the world among strange people and in this strange construction of English oak which both transports and imprisons me! (I am aware, of course, of the amusing “paranomasia” in the word “transport” and hope the perusal of it will afford you some entertainment!) (pp. 223—24)

この一節を一読して気づくことは“strange”の繰り返しである。船の社会の中で嫌われ、疎外されている立場にあることへの戸惑いと孤独感を Colley

は妹に伝えようとしている。¹²と同時に、決して“trivial”と片付けることはできない“offence”を行ったことへの困惑が、自分と自分を取りまく人々の奇妙な振舞い、混乱した思考、異様さに対する不安と重なっている。

Golding は Colley を“humble”で“meek”な牧師として造型してはいない。乗船して間もない、まだ船長との確執が始まる前、水平線に見知らぬ船の帆が消えていくのをぼんやりと見つめていた時、Colley はふと、それが敵船で自分たちの船を襲い自分が勇敢に戦っている空想に耽っているのに気づく。Colley はそんな自分を反省して、“The sin was venial and quickly acknowledged and repented” (p. 188) と書き記しているが、“England’s Hero”の Nelson 提督の傍らで戦い“fame”を得ることを時々「夢みている」のを認めている。Golding は、Conrad の Lord Jim のように、“day-dreaming”に陥り易い、自己拡大の想像力豊かな人間としての一面を Colley に付与しているのである。

Anderson 船長との行き違いがひどくなって、三度目の会見で船長のふるった腕が肩にあたり、その腕が小柄な Colley の顔にぶつかって Colley が倒される出来事がおこる。彼は船長のことを“an enemy to religion”と考え、“Oh what a spotted soul !”と裁断を下すのであるが、救世主のキリストも迫害にあったことを思いながら次のように手紙にしたためている。

It is true I had been foolish and was perhaps an object of scorn and amusement to the officers and the other gentlemen with the exception of Mr Talbot. But then — and I said this in all humility — so would my Master have been! At that I began to understand that the situation, harsh and unjust as it might seem, was a lesson to me. He puts down the mighty and exalteth the humble and meek. Humble I was of necessity before all the brutal powers which are inherent in absolute command. Meek, therefore, it behoved me to be. My dear sister —

Yet this is strange. Already what I have written would be too

12. この疎まれている自分の立場への認識は、赤道祭で“jest”の的となり、人前でシャツ一枚にされて汚水・汚物に浸された時極限に至り、牧師の Colley は“*I was the foe !*”という“awful truth”のために血も凍る思いをする (pp. 237—38)。

painful for your — for her — eyes. It must be amended, altered, softened; and yet —

If not to my sister then to whom? To THEE? Can it be that like THY saints of old (particularly Saint Augustine) I am addressing THEE, OH MOST MERCIFUL SAVIOUR? (p. 208)

Colley の英雄願望と活発な想像力は、彼が自分をキリストと同一視して殉教者の立場に身を置くことを準備してくれていたのである。Colley は殉教者のヒーローとなることによって、またキリストと同じ高みから船長たちの上にあることを信じてみじめな自分を救済し、自分を辱めた人々に慈悲を施そうとしたのである。彼が船長、Deverel, Cumberghum を「イスラエルの子孫にあらざる」人々と裁断した時、キリストに帰さるべき位置に自分を置いたのであって、“trivial” と片付けられない“sin”の行為に立ち入ったのであった。

Colley は“the oddities of behaviour”という表現を記す5頁ほど前に、形容詞“odd”を用いている。それは、“my young hero”のハンサムな水夫 Billy Rogers に見とれて、“my kingdom of lobby, cabin and waist” (p. 217) において自分が“dethroned”し“a new monarch”として Billy を王座にすえようと空想した時のことである。¹³ 彼は“I had an odd fancy” (p. 217) と書いている。そして更にこの「王」に仕立てた若者の前に“kneel”したいと思い、“OUR SAVIOUR”の前へ彼を連れていたきたいという“a passionate longing”を抱くのである。さすがに“I grow fanciful”と記しているが、この美少年を自分の物にしたいという性的欲望の意識化を抑えようとしているのである。

Colley の“strange (ness)”の繰り返しには、自分に理解しがたい、異様な自分の内面への不安が窺えるのであるが、その繰り返しによって同時に“trivial”とはいえない“offence”を行う不可解な自分を静めようとしている。彼が妹に対してカッコでくくって補足した部分は、言葉遊びで気分を軽くしようとするものである。しかし、“paranomasia”が楽しいよ、と挙げた

13. Colley は“kingdom”を多用しているがその背後には、キリストの原意「油をそそがれた者」(ヘブライ語の「メシア」, つまりイスラエルの王) から見て、彼が自分を救世主と同一視している気持ちが潜んでいる。

“transport” は、いわば “dramatic irony” として Colley 自身にはね返ってくるように作者 Golding は仕掛けているのである。

(5)

「勿論僕は、“transport” という語に面白い “paranomasia” があることに気付いているし、君がその語を吟味してみると結構楽しめるのじゃないかと思うよ」という妹への Colley 牧師の書き足しは、確かに彼の言葉への関心を表している。その興味は、そのように書いた直後に手鏡で “my appearance” を見、女性は同じように鏡を使って “self-admiration” の “art” を用いるのかと記した後、“In my own case, of course, I use the word in its original sense of surprise and wonder rather than self-satisfaction!” (p. 224) と註釈を加えていることにも窺える。更に、船酔いのためにひげをそれなかったと書く時、“nausea” について “the word indeed derives from the Greek word for a ship!” (p. 225) と語源説明まで行っている。¹⁴

Johnson の *A Dictionary of the English Language* (1755) で “transport” を今一度「吟味」してみると、まず、“1. To convey by carriage from place to place” とあり、Colley が船でオーストラリアに運ばれていることを指すわけで、Talbot が「航海」の意で用いている “passage” に相当している。と同時に、既述したように、“imprisons me!” という句の連想から、“2. To carry into banishment : as a felon / 3. To sentence as a felon to banishment” が掛けられている。因みに *O.E.D.* 第二版を見ると、2. c. に “To carry away or convey into banishment as a criminal or a slave ; to deport” とあり、その定義と重なるのであるが、2. a. では “*Sc. Ch.* To translate (a minister) from one charge to another” の語義が

14. もともと言葉への関心の強い Talbot は、Colley の手紙を読んで “paranomasia” という語を知ると、早速日誌の中で用いる。それは Colley の葬式の後のことで、“Now the poor man’s drama is done and he stands there, how many miles down, on his canon balls, alone, as Mr Coleridge says, all, all alone.” と記した後、Colley のドラマから日常の瑣末な事柄に戻るのには “a different sort of bathos” と述べ、すぐ次のように補足している — “your lordship, as Colley might say, will note the amusing ‘paranomasia’” (p. 264)。Colley の “nausea” 説明と同じように、Talbot は、“bathos” が海の底を暗示する “depth” の意のギリシア語を源としているのに後楯の注意を向けたのである。

あって（初出の例は1637—50 Row *Hist. Kirk.*）、案外に牧師の Colley はそれをも匂わせていたのかもしれない。「吟味」したら“some entertainment”をこの“amusing”な単語から得られると妹に述べていることから判断すると、美少年、美男子に弱いこの兄は、Johnson の次の二つの語義“4. To hurry by violence of passion / 5. To put into ecstasy ; to ravish with pleasure”をも無邪気に掛けていたのは間違いないであろう。

Anderson 船長に忌み嫌われた Colley は、同じ階級の“ladies and gentlemen”から挨拶のお返しをして貰えなくなり、自分が自由に動ける「ロビーと船室と上甲板中央部」を、既に述べたように、“my kingdom”に仕立て、船首楼の平の水夫の中で特に美しい、“a narrow-waisted, slim-hipped yet broad-shouldered *Child of Neptune*” (p. 216) の Billy Rogers を、その王座にすえ、その前に“kneel”することを夢想したのであった。だが、Colley がこの美しい水夫よりも先に王座にすえたかったのはハンサムな貴族の青年 Talbot なのである。

階級意識は強いが宗教に熱心でない Talbot は、低い身分出身の Colley 牧師を嫌い、近付かれてペコペコされると我慢できない苛立ちを感じる程なのだが、キリスト教にすべての人が服するのは当然と思い込んでいる、この見かけに弱い牧師は、Talbot を“one true gentleman”と考え、“a true friend to religion”と信じる。Talbot をキリストに対する如くに崇める讚美の裏には、女性よりも男性に愛情を感じる Colley の性向が存在していて、それは、食中毒でふせった Talbot をそっと訪ねて、意識もうろうとした Talbot の手にさわる場面にはっきりと現れている。

I did dare to cross the lobby softly and knock, but there was no reply. Daring still further I lifted the latch and entered. The young man lay asleep, a week's beard on his lips and chin and cheeks — I scarce dare put down here the impression his slumbering countenance made on me — it was as the face of ONE who suffered for us all — and as I bent over him in some irresistible compulsion I do not deceive myself but there was the sweet aroma of holiness itself upon his breath! I did not think myself worthy of his lips but pressed my own reverently on the one hand that lay outside the coverlet. Such is the power of goodness that I with-

drew as from an altar!

(p. 212)

Talbot を人のために十字架にかかったキリストに見たてたり, “holiness”, “reverently”, “altar” といった宗教色の濃い言葉を使ってはいるが, Colley の筆使いは悩ましく, 色っぽい。この場面から10頁ほど先で Colley が “transport” に掛け詞の楽しい遊びがあると妹へ書いているのを読む時, Golding が性的内包をこの語に与えているのは間違いない。更に, 私たち読者は, 100頁ほど遡って, Colley 牧師が悪魔の飲みもの, ラム酒に酔って, 公衆の前で “Joy!” と叫び, 立小便をした場面を思い起こすであろう。

Talbot は何が起こっているのかを知らないで, そして彼の日誌を通してのみ Colley を見ていた私たち読者も彼と同じ位置にいて船首楼で何があったのかを知らないまま, Colley 牧師が若者に抱きかかえられて船首楼から泥酔した姿を見せた時, あきれてびっくりする。牧師はすべての人々を “embrace” するように両手をさしのべて “Joy! Joy! Joy!” と叫ぶのである。この叫びは Conrad の『闇の奥』における Kurtz の “The horror! The horror!” という自己認識の言葉を思い出させる。語り手 Marlow はこの2回の叫びを, それは息たえだえのささやきだったのだが, “a whisper at some image, at some vision” だったとし, “a judgment upon the adventures of his soul on this earth” だと言及している。¹⁵ Colley は, Kurtz のように, 自分自身の裡にひそんでいる, 今まで意識化していなかった, 知らない自分を認めたのである。

Colley を船首楼から抱きかかえて連れ出した水夫は, 査問の時に Talbot が知るように, 左頬にひっかき傷はあるものの “handsome face” の Billy Rogers であった。この水夫に対する審問での, “beastliness”, “buggery” といった言葉のやりとり (pp. 253—55), また彼が仲間に, 牧師に初めて “chew” されたともらしていた (p. 273) と知る時, Colley が美しい水夫の前に “kneel” して “put into ecstasy” になっていたことが明らかとなる。作者 Golding が “transport” という語の “paranomasia” に仕掛けた劇的アイロニーの矢は Colley の胸に突きささっていくのである。言葉で直接的に描か

15. *Heart of Darkness* (W.W. Norton & Company, 1971), p. 71. この中編と *Rites of Passage* との類似は, Don Crompton が *A View from the Spire* の中で指摘している (134—35頁参照)。

れない Colley と Billy Rogers との “fellatio” 行為は、Talbot と Zenobia との行為とパラレルになっていて、それも一つの “passage (of arms)” と言えるであろう。

(6)

Colley は一切の飲みもの、食べものを断ち、死を迎え、水葬にふされる。その葬式は “sad ceremony” と言及されており、“pass” に “die” の意味が掛けられ、葬式も一つの “rite of passage” となっている。Talbot は、Colley に死を決意させたものを考え、牧師が垣間見た「地獄」を “the lowest hell of self-degradation” と呼んで、その精神的落下を次のように記述している。

Just as his iron-shod heels shot him rattling down the steps of the ladders from the quarterdeck and afterdeck to the waist; even so a gill or two of the *fiery ichor* brought him from the heights of complacent austerity to what his sobering mind must have felt as the lowest hell of self-degradation. In the not too ample volume of man's knowledge of Man, let this sentence be inserted. Men can die of shame. (p. 278)

Colley 牧師の “spiritual passage” はキリストと一緒に航海であった。美少年 Rogers との同性愛行為に快樂を知った Colley は、「イスラエルの子孫にあらざる」と裁断した船長たちと同じように、自分自身がキリストと同席できる人間ではないこと、救われるものではないと認識したのである。彼の自己認識の航海は垂直的といえる落下の “passage” であった。

峻厳な自己処罰に到着した Colley の精神的航海に比べれば、Talbot のそれは水平的である。確かに Colley と接したことで、“Men can die of shame” という人間について新たに考えることはするものの自己反省は弱い。Prettiman と Granham 嬢とが牧師の葬式の後で交す会話 —— “Let us hope he learns in time, then!”, “Despite the disadvantage of his birth and upbringing, ma'am, he is not without wit.” —— を耳にはきんだ時、それが自分のことを言っているのだということがわからない。彼らの “disadvantage” の使い方が、自分の価値基準と異なることを認識していない

のである。Talbot の自己満足的優越感が皮肉られ、彼の精神的成長が不十分であることが明らかとなるが、作者は一方で彼がめざめようとしていることを匂わせている。

Talbot は Colley の手紙を読んで、“the most gentlemanlike officer” と判断した Deverel が牧師をなぶりものにした当人であることを知る。更にこの士官が Anderson 船長を中傷するのに自分を利用しようとしているのを知った時、Talbot は自分も彼と “like-minded” ではなかったかと “shame” で顔を赤らめる (p. 269)。彼は万一 Zenobia が妊娠することがあったら Colley 牧師とくっつけて、“a possible embarrassment” を回避しようと考えたことがあったのだ。この自己認識には彼の精神的成長の可能性が示されていると言えるだろう。彼は日誌を次のような文で締めくくっている ——

With lack of sleep and too much understanding I grow a little crazy, I think, like all men at sea who live too close to each other and too close thereby to all that is monstrous under the sun and moon. (p. 278)

人間という “monster” を知る航海には狂気がつきもので、目的地がないことを Talbot は予感しているのかもしれない。